

Title	人物の類型化と感情 : 常識を基軸とした日常会話分析の試み
Author(s)	野呂, 香代子
Citation	阪大日本語研究. 6 P.29-P.52
Issue Date	1994-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/11695
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

人物の類型化と感情 - 常識を基軸とした日常会話分析の試み -

Categorization of Person and Affection - An Attempt to analyse
everyday conversation following a common sense approach -

野呂 香代子

NORO Kayoko

キーワード：類型的知識，認知，社会心理，含意，意味の多層性

0. はじめに

日常交わされる会話には多分に感情的要素が含まれる。そのため、しばしば命題の意味の伝達を主とする談話形態、たとえば、学問的な談話と日常会話が比較されたりする¹⁾。そのとき、論理と感情が対立概念となって説明されるのであるが、日常会話は論理性が後退し、感情が支配的な対話形態であると考えていいものだろうか。発話者は各々の場面に有意味な論理と同時に感情を呈示し、聞き手もそれらを読み取ろうとするのではないだろうか。筆者は論理と感情を対立させず、日々人々が認知し、使用する感情を内包した論理、ルール、基準が日常世界に存在する故に言語活動を通して感情的交流が行われると考える。そうした論理性を提供するものとして事物、事態、時、空間等々、日常世界を類型化した知識（いわゆる常識）に注目することが本論のねらいである。

類型的知識の代表例として人物の類型化に関わる知識を考察対象とする。言語による人物の類型化という、言語と指示物と意味に関する言語学上の基本的な問題をここでは言語学の枠組み内で捉えず、人々の社会的活動の中で、より具体的には発話者と参与者間の社会的相互作用という観点から

扱う。言語（を媒介とした類型的知識）と言語により指示される現実の人々（の身体、および、それを用いた態度、行為）との自律性および相互依存性に目を向け、発話者の視点から日常会話の発話環境を眺めることで、様々なニュアンスを伝えうる発話的意味の構成を観察してゆく。

1. 研究の枠組み

本論は大きくは Alfred Schutz から P.L.Berger/T.Luckmann（以下B/L）やエスノメソドロジストへと引き継がれてきたいわゆる「常識」研究の一つとして位置付けられる。基本的には、Alfred Schutz および B/Lの類型化の考え方をもとに、方法としては、Harvey Sacks(1972a,1972b)や Lena Jayyusi(1984)の成員カテゴリー研究を発展させたものである。

Alfred Schutz はその存在が自明視されている生活世界に目を向け、人々がいかに類型化を通して当たり前の世界を築いているかを示そうとした。同様にB/Lも日常語と知識に注目し、自分の外にある‘存在物’として認識される社会と、アイデンティティなど個人に関わる主観的意味との弁証法的関係を捉らえるために “The Social Construction of Reality”（『日常世界の構成』1966）において日常会話研究の意義を説いた²⁾。

会話分析の創始者である Harvey Sacks(1972ab)は、文法装置ではなく、常識世界からなる文化的装置が談話に結束性を与えているとして類型化の問題に取り組み、人が人を組織的に類型化する装置－成員カテゴリー化装置－を提唱した。Jayyusi(1984)はその概念を用いながら、成員のカテゴリー化活動に道徳性が埋め込まれていることを呈示した³⁾⁴⁾。

最近では社会言語学や語用論関係の入門書においても会話分析が談話分析の一分野として紹介されるようになったが、主にturn-takingをはじめとした会話機構の紹介に片寄っているのが現状で⁵⁾、Sacksが行なったもう一つの柱であるカテゴリー研究はまだ不十分な状態である⁶⁾。

本論では第2章、第3章で、人物類型に関する認知傾向と社会心理的側面を分解して考察することで、SacksやJayyusiが呈示するにとどまった類

型化に伴う規範性の問題を掘り下げ、感情を内包した日常論理が発生するメカニズムについて検討する。第4章では、会話参加者の関係性に焦点をあて、発話的意味が多層的に構成されている実態を観察する。意味の多層性は、言語の命題的意味を重視した発話行為論に基づく談話分析では扱うのが困難な問題である。

2. 類型化にみられる認知図式

まず、人物類型として対象を認知する一定の傾向について検討する。ここでいう認知とは社会心理的側面をとりあえず除外し、類型化に関わる概念的な操作にだけ注目したものである。本章で示される認知上の傾向が、次章の社会心理的側面を考察するための土台として寄与することになる。

2.1. 類型的知識の優越性

たとえば「母親」という語をきけば、眼前に指示する対象がいなくとも一定の形態や意味内容（エプロン姿、優しい笑顔・・・）が想起される。人はこうした連想を類型的知識としてもっている一方、「母親」という語を用いて‘子供を産んだ女性’を指示することができる。このとき‘子供を産んだ女性’という意味はある対象を類型化するための条件として、あるいは、対象に資格を付与するための基準として作用する。これは言語から見ると内包的意味と外延的意味について述べたにすぎないが、人々の認識と存在という点からこの問題を考えてみると、「母親」など人物類型により指示される人物はその類型的知識により構成される認識世界とは独立して‘物理的に’存在し、そういった知識とは関係なく行動することが可能なはずである。言い換えれば、資格付与基準を満たした対象の行為や態度（の印象）と類型的知識の中で抱くイメージとが一致するという保証は全くないはずである。それなら「母親」という言葉を媒介とした二通りの母親の‘姿’（イメージとしての姿とその言葉により指示された人々の現実の姿）が指示対象との出会いのたびに対比され、その相違点や真偽性

(赤ん坊を抱いている女性は本当の母親か?) が意識されてもいのように思うが、実際には、子供を抱いた女性が自動的にその子の母親と理解されたり⁷⁾、父親がエプロン姿で料理して母親が新聞を読んでいるは「変っている／珍しい／おかしい・・・」と感じられたりする。すなわち、日常的には、

(1) 両者の相対的な対比は行なわれず、類型的知識が先行する(いわゆる思い込みが生じる)か、

(2) 類型的知識が基準となって絶対的な対比が行われる、という傾向が強いようである。

(1)の場合、ある個人XがAと類型化されると、Aに付随すると考えられている類型的知識aにXの態度や行為が一致すると想定される。このような想定を $X = A(a)$ という関係式で表すことにする。人を認知する図式 $X = A(a)$ があると、これを基準に類型化した個人の態度や行為を過去、現在、未来にかかわらず推測したり、断定したりすることが可能となる。また、行われた(行われている、行われる)行為や態度に対し、その理由を類型に求めることができる。

推測/断定	$X = A \rightarrow X(a)$	Xハ Aナラ/ダカウ	Xハ aダ 〇ウ/aダ
-------	--------------------------	------------	-------------

(例 1) ガールフレンドに向かって

A: 貴子, 貴子は女や, 女にはボクサーは無理や

理由付け	$X(a) \rightarrow X = A$	Xガ aナ/ハ	Xガ Aダカウダ
------	--------------------------	---------	----------

(例 2) 友人同士の会話。Aの父親について

A: ...でもうちは特別なのよ

B: そうよね... 会長だもんね

この認知図式と言語形式との関係について述べると、人々の間に知識としてこの図式が備わっている限り、会話においてはX, A, aに当たる部分が全て言語的に呈示される必要はなく、その一部が明示されるだけで、残りが（発話環境の助けを借りて）含意されることになる。

（例 3）客に向かって気色ばむ店主の夫 A に妻 B が言う。

A：何だと！？

B：お父さん、お客さんなんだから

また、(2)は(1)の推測が自動的にいかない場合である。類型的知識に基づく推測が現実の対象の態度や行動と異なっていれば、推測した結果の方が訂正されるというより、対象の行動の方が普通の行動に従っていないと認知されることが多いようである。つまり、この場合、起こった事態は、類型的知識が基準となつて、「XはAであるのにaでない」事態として認知される。こうした認知図式を(1)の $X = A(a)$ に対し、 $X \neq A(a)$ と表わすことにする。 $X = A(a)$ と問題なく把握される事態、すなわち、類型的知識と対象の態度や行為が一致している事態に対しても、 $X \neq A(a)$ と認知される事態、すなわち、不一致の事態に対しても、言語的には $X = A(a)$ という形式で両方の事態を指示することができる。しかし、前者からは「当然性」、後者からは「逸脱性」が含意される。(例 4)は類型的知識（女は美しい）と一致した事態に対して発せられたものである。

（例 4）

俺も女に生まれりゃよかったスよ、あんたみたいな美人に・・・

女は美人でなきゃ・・・

この下線部を $X \neq A(a)$ の事態、つまり、美しくない女性に言った場合、言語形式が同じでも発話の意味が全く異なってしまう。

この言葉と指示物の関係を社会化の過程から考えてみると、なぜ類型的知識が優先されるのか、その理由が明らかになろう。

幼児ははじめ言葉を用いて具体物を指示するという行為を学ぶ。たとえば、「お母さん／お父さん」という語を自分にとって意味ある特定の個人をさす言葉として理解するが、やがて、物語や大人、仲間等との会話を通して、母親／父親が複数存在していること、家族という枠組みに入ること、それぞれ一定の役割を担っていることなどに気付くとともに、自分の母親／父親もそうした（感情的要素を包み込んだ）類型的な知識の中に位置付けて捉らえることができるようになる⁸⁾。

大人から言葉を学び、現実を類型化してゆくという社会化の過程で「言葉は子供にとって物事の本性に属する事柄として現われる」⁹⁾。つまり、言葉を通して築かれる社会的世界は子供にとって客観的な存在物として受入れられ、自分がそれに対して抱く感情もその存在物に付随しているものとして認識するようになる。母親や父親の存在も、それに付随する連想も子供の客観的および主観的現実を構成することになる。

また、自分の個人的な経験も言語により類型化された記述を通して人に語るができるようになる。言語を用いて他者との相互作用を繰り返す中で自分の認識する世界と他者の世界とのある程度までの一致を自明視する間主観的な常識世界が築かれてゆくことになる。こうした他者との知識の共有を疑わない態度が自然的態度と呼ばれるもので、自然的態度においては、眼前の人々の行為が自分（の目的や価値など）にとって問題とならない限り、自分の持つ常識世界は維持される。また、類型化を通して人物を見ることでその者の態度や行為などは間接呈示され、過去や未来にわたる行為がある程度まで予測できるようになる¹⁰⁾。

2.2. 集合性と排他性

次に、言語と指示対象との関係を概念世界および（物理的に存在する）現実世界の言語による分割化という観点からみてゆく。言葉により知識が分割され、知識間の区別が生まれるだけでなく、事物も指示対象として他

との区別において選択される。ある人物類型を発話に用いることで、原則的にはその類型に属し得る人々全てを類型の占有者として引き入れることが可能となる。また、そうすることで、その占有者以外の人々の排除を招くことになる。つまり、言葉のもつ集合性と排他性を利用して言葉を操作するだけで、（潜在的の／実際の）集団を組織することができ、他者を仲間に入れたり排除したりすることが可能となる。

2.2.1. 集団化と一律化

ある人物類型で一人の／二人の、または、それ以上の／不特定多数の対象を指示することができるが、これは、類型化に集合性が含まれているからで¹¹⁾、個人が人物類型で指示されると、その者は潜在的に集団の一員となる。つまり、類型化された対象は特に矛盾が生じない限り、その类型的知識の具現化された代表とみなされることになる。この原理を活用すれば個々人の行為／態度を材料として人物類型と結びつけてその集団全体を評価（非難、称賛など）の対象とすることが可能となる。

（例 5） あっこの夫が海辺で若い女性たちと話している。

あっこ：ふん、どうぞ、ご勝手に。私には太郎がいるもんね

（太郎、母親の集めた貝をとる）ちょっとどこに持っていくの？

太郎：（近くにいる女の子に）ドード

あっこ：ンマー、太郎まで・・・男なんてみんな信用できないわ

（例 5）においては二人の対象を扱っているだけであるのに使用された類型「男」の後に「みんな」が付加されている。これは集団化が言語的にも示された例であろう。

また、類型を用いて個人を評価するとその類型に属し得る人物全てがその評価の影響下におかれることになる。

（例 6） 男性 A が知り合いの女性 B の前で妻の悪口を言っている。

A : 文句でも言おうものなら二倍になって返ってきます。まったく女って奴は・・・(Bを見て)おっと、こりゃ失礼。

AはBに対し、自分の妻の悪口を言ったのであるが、その事象は本来無関係なはずのBまでを類型化を通して評価の対象に巻き込んだことになる。

また、このように人々を集団化して捉える見方は個々の対象の個別性を無視するという事態を招く。言葉(類型)により想起される意味特徴をその者が持ち合せていなくても付随しているものと見なされ、反対にそれ以外のものをもっていてもそれが付随していないものと解釈され、その者を見る前提が作られる。対象が複数の場合も同じ類型の下に一括されると個人が全て一律に扱われることになる。一律化と集団化は同時に含意しあうもので、類型化により、「皆(その集団)と同じ(一律の)状態」が‘当たり前’の事態として用意される。これを式で表わすと以下のようなう。

$$X_1, X_2, X_3, X_4 \dots = A(a)$$

2.2.2. 類型間の相互排除

ある類型が発話の話題になると、その類型および類型化された対象は他の類型あるいは他者との区別において選択されたことになる。

(例 7) (ボクシングのコーチが弟子に)

コーチ：派手なことやって倒して目立ってこそプロや。高校のアマチュア違うねんぞ。

(例 8) (研究室にて。研究室のタオルを既婚の学生Eが洗濯したらしい)

男A：わっ、タオルきれいになってる

女B：Eさんがしてくれた

男C：主婦は違うなあ

女D：さすが奥さん

(例 7) では、「プロ」が「アマチュア」と明示的に対比されている。

(例 8) では「主婦(あるいは奥さん)」という類型が話題となっているが、「主婦」はここでは述べられていない主婦以外の人、たとえば、独身の男女と対比されて用いられたと推測される。

(例 9) (夫婦の会話)

夫：店は？ お前がいなくなったら？

妻：私，女ですから。一人でお店仕切るなんてとてもできやしない。

この例においても「女」は明示されていない「男」との関係において話題にされていることが(かなり確実に)予想される。

このように、類型化のもつ排他性の基本には関連する類型間および類型化された対象間で行なわれる対比作業が含まれると考えられる。一般に対比作業には、他者を区別するための基準、あるいは、上位概念となるものが必要であるが、Sacks(1972b)は成員カテゴリー化装置という概念を呈示することで、類型間の関係を説明した。たとえば、泣いている「大人」に向かって「赤ちゃんみたい」と言えば、「泣く」という「赤ちゃん」に付随する知識¹²⁾をめぐって「赤ん坊」「大人」という類型が関連性の規則により「人生の段階」という成員カテゴリー化装置から引出されたことになる¹³⁾。つまり、一定の知識と類型との間に有意味な関係、因果関係などが社会的に成立しており、両者の結びつきは発話に論理性を提供することになる。この例では「赤ちゃん」に付随する「泣く」と「大人」の「泣かない」が非対称的相互排除の関係¹⁴⁾におかれ、「大人」と類型化された人物の行為が典型的知識と一致していないこと、つまり、その人物の矛盾した行動が評価の対象とされる。

成員カテゴリー化装置のように、一定の関係性の中で人物を認知する装置が(社会化の結果)人々に備わっていると、人物類型A(あるいは、それに付随する知識a)を呈示するだけで、他の関連類型B(あるいは、その典型的知識b)が言語的に呈示さなくとも含意されることになる。aあ

るいは b は言語的に具現化される時点の発話環境や発話意図により柔軟に変化するが、利用可能な‘原料’は話者の（相手との共有を想定した）知識の中に備わっている。a と相互排除の関係になる b は、その場の談話で示される具体的な形での a の欠如（あるいは、その反対）となり、それが言語的に呈示されたり、あるいは、暗示されたりすることとなる。つまり、談話の具体的な関連性の中で、 $b = -a$ （あるいは $-a = b$ ）という非対称的相互排除の関係が成立することになる。それぞれの例において言語的に呈示されたのは、□で囲んだ部分で、点線部は暗示される。

（例 7 の図式化）

A (7°□)	B (7マチュ7)
a (派手なこと…)	b (派手なこと…をしない)

（例 8 の図式化）

A (主婦)	B (独身)
a (洗濯好き, など)	b (洗濯好きでない, など)

（例 9 の図式化）

A (女)	B (男)
a (一人で…できない)	b (一人で…できる)

なお、三つ以上の類型間でも対比は行なわれ得るが、二者間の対比に準じるものとしてここでは扱わない。

本章に述べたことを簡単にまとめれば、以下のようになる。

人物の類型化においては、発話意図に応じ、二つ（以上）の類型を対比させる、

$$X_1, X_2, X_3, X_4 \cdots = A(a)$$

$$Y_1, Y_2, Y_3, Y_4 \cdots = B(b), \text{ このとき } b = -a$$

という認知図式が備わっている。そのため、 $X = A$ [たとえば、「おまえはプロだよ」] や $A(a)$ [たとえば、「プロなら～できるだろ」] などという言語的呈示で、残りの知識が含意される。また、こうした知識の論理性により、人物を類型化することで、その人の行為／態度を推測、断定したり、理由付けたりすることができる。また、類型的知識と行為／態度の一致は「当然性」を、不一致は「逸脱性」を生む。

3. 類型化と社会心理

前章でみてきた類型化の認知図式を感情と関連づけて捉らえるためには、類型的知識を共有する集団の一員としての個人の社会心理的側面を扱う必要がある。しかし、社会の制約を受けながらも自身の意図を表明する話者自身の‘自由空間’についてみてゆくことも忘れてはならない。以下では、社会と個人の位置付けを問題にしながら類型化により発話に現われる（含意される）意味について検討してゆく。

3.1. 類型的知識と話者の価値観

3.1.1. 当然性／逸脱性と話者の価値観

ここでは、2.1.で扱った「類型的知識の優越性」と感情の関わりについて述べてゆく。類型的知識は元来個々人の歴史や利害状況により柔軟に変化し得る不安定なものである¹⁵⁾が、言葉を通して示すことは、その知識を客体化させ、存在論的地位¹⁶⁾を与えることに、また、類型的知識を基準に対象の行動をはかろうとする態度は、人々が築いてきた社会的現実を

安定させることに貢献する。類型的知識には言語的意味の新情報は全く含まれておらず、人々に周知の知識を呈示することの意義は根本的には常識世界の維持活動にあると思われる。言い換えれば、自然的態度の背景には、秩序の崩壊、アイデンティティ喪失など客観的および主観的現実のマージナルな状況に対する恐怖心が常に潜んでいるため¹⁷⁾、安定性に対する欲求(不安定に対する不安感)が「普通の」状態に正当性を与え、それを「正しい」状態とする認知／行動傾向をつくることになる。こうした中で人々は行動や態度の類型的知識への合致を期待(要求)するようになり、類型的知識の記述は規範上の正当化図式の体系と一体化したものとなる¹⁸⁾。

いま、「母親」という人物類型に対し、「子育てする」という知識が世間一般にあり、話者もそう信じて疑わないとしよう(この者を話者1とする)。この場合、類型的知識に一致したと認知する事態[$X = A(a)$]はその者にとって「当然」で「正しい」事態であり、不一致の事態[$X \neq A(a)$]、たとえば、母親の単身赴任などは「逸脱」した、「卑下／非難」すべき事態となる。話者1が言語的に $A(a)$ 、たとえば、「子育ては母親の役目ですからね」と前者の事態を生じさせている者に対して言えば、称賛の表明となり、後者の事態に対して言えば非難の表明となる(自身の行為に対しては前者は正当化、後者は卑下となる)。ただし、それがどういう意味に理解されるかは聞き手の価値観に依存するので、ここでは、話し手だけを問題とする。

しかし、当該の類型的知識を世間一般の常識として把握する一方で、自己の生活態度や価値観をそこにおかないという人もいよう(この者を話者2とする)。この場合もやはり類型的知識に一致した事態は「当然性」を生むが、それが必ずしも「正しさ」へと向かわない。また、不一致の事態は「逸脱」として認知されるが、それも非難すべき対象とはならない。こうした態度は社会的現実を維持する方向とは逆の、変化させる方向への力となりうる。話者2が話者1と同様、言語的に $A(a)$ を呈示してもそれは、皮肉やジョークにさえなる。また、逸脱した事態[$X \neq A(a)$]に対し、「母親が単身赴任なんて！」などと言ったとしても、話者1なら非

難の表明「母親が単身赴任なんて（ひどい、情けない・・・）！」となる
ところ、話者2なら称赞「母親が単身赴任なんて（かっこいい、うらやま
しい・・・）！」となる。

3.1.2. 類型間の対比と話者の価値観

2.2.2で扱った類型間の相互排除の問題をここでもう一度みてみよう。

（例7）（例8）は類型AとBが違うということを言語的に表現したにす
ぎないが、他の類型との違いの表出が中立的な対比を表わす記述となっ
ていないことは明らかである。いずれの例においても

[プロ] は [アマチュア _____] とは違う

[主婦] は [主婦以外の人 = 独身?] とは違う

（下線は言語呈示部分を示す）

と、一方にプラス価値、他方にマイナス価値を付与することで二つの類型
を非対称的相互排除に関係におき、どちらか一方の類型を話題にしている。
この相互排除性は話者が発話意図に応じ、二つの類型、および、指示対象
を類型的知識の枠内で、（社会的地位、年齢、肉体、能力、権力上の）非
対称的な力関係の中におくことで意味づけられる。たとえば、力の強弱関
係、道徳的善悪、正誤、通常／異常の関係で捉えたり、プラス／マイナ
ス価値を付与したり、一方の権利、義務を強調したりすることで、相互排
除性は様々な形の相互作用に具現化されるといえる。

3.2. 内外集団

ここでは、2.2.で扱った集合性と排他性の問題を話者を中心とした集団
形成と感情の関係において検討する。

人を類型化する最も基本的な基準は自分を含む集団（内集団）と含まな
い集団（外集団）との区別ではないかと考えられている¹⁹⁾。内外集団を
区別することで生じる社会心理的傾向としてあげられるのは、内集団成員
に対する連帯意識や外集団成員に対する排他意識である。内集団の成員間

においては互いをひいき目にみる傾向があるため²⁰⁾、内集団成員の人柄、思考、行動様式は「良い、正しい」と肯定的な価値観、道徳観を伴って評価されやすく、外集団の場合はその反対となる。これらが内集団成員に対する期待として働くと、連帯意識、感情共有、助け合いや領域侵犯の許容が要求されたりする。外集団成員に対して助け合いは求められず、領域侵入が禁止される。また、外集団に対する無知から外集団成員同士は同質的であると認知されやすい²¹⁾。その上、無知な対象には恐れや防衛心が伴いやすいので、外集団には否定的要素を伴ったステレオタイプが生まれやすい²²⁾。これを集合性／排他性における基本的な傾向と重ねると、外集団が集合的に扱われ、軽蔑、批判などが含意されやすいことがわかる。外集団に対する批判は同時に内集団に対する正当化作業として、また逆に、内集団に対する正当化は外集団に対する批判として機能する。

これを言葉による類型化、つまり、話者が行なう類型化活動という点から考えてみると、話者は話題となる類型を選択、操作することで自分を含めた内集団と自分を含めない外集団とに参加者を配属させることができるということになる。(例 7) や (例 8) のように、会話参加者と「同じ」、あるいは、「違う」類型に属しているということを示すだけで話者は以上のような感情を表出することができる。なお、自分と誰かが「同じ」であることを示すためには、「異なる」対象がいなければならず、内集団化と外集団化は同時に行なわれるものである。話者と他の会話参加者との間の内／外集団関係が異なると、たとえ言語形式上同じ発話であっても発話の意味が大きく異なってくるのだが、この点については第4章で詳しくみてゆこう。

4. 話者と会話参加者間の多層的類型関係

第3章では、第2章でみた認知的図式に社会心理的側面が関与する事情を説明した。本章では、実際の談話資料をもとに話者と他の会話参加者との類型関係に注目しながら、感情を内包した発話の意味が多層的に構成され

ている実態を観察してゆく。ここでいう会話参与者とは実際に会話の場に
参加している人のみならず、類型化を通して話題に関わり得る対象も全て
含む。

用いる談話は1993年8月に清子(60)、昭夫(63)夫妻宅の夕食時に録音し
たものである。夫妻の娘、薫と絵里、清子の母親、それに、薫の夫、およ
び、その娘が訪問客として同席している。現在昭夫が入っている碁の会に
おける昭夫の行動が話題となっている。毎回昭夫一人が会の準備をしてい
ることに對し清子が以下のように言っている。

- 清子：うちら、その場で言うてしまうもん。なんで私ばっかせなあかん 1
のよ。そんな、みんな回ってしたらええんやし。誰も言わんわ、 2
初めから、女は。女は初めからうまいことみんな順番にやるわさ 3
なんでも。いつ終わるかわかれへんねんで、お父ちゃん、当番で 4
もなんでも碁でも。ほんで、お父ちゃんひとりお茶沸して鍵もら 5
いに行って開けて、いや、お父ちゃん、ほれ、自分で好いてるか 6
して何も言わへんけど、私らに言わしたら、あほか、十何人もい 7
てんのに、なんでお父ちゃんばっかせなあかんのって思うてあか 8
んのやわ 9
- 昭夫：まあ、そやけどな、まあ碁はやっぱり、あの、段があるわけや。10
な、やっぱりな、おれ、一番下やねん、一番弱いねん 11
- 清子：そんなん関係ないわ 12
- 昭夫：いやいや。やっぱりそこはやっぱり教えてもらういう、何が、 13
考えあるやん 14

4.1. 人物類型の共時的複数性

一人の人物はその場の状況に応じ、様々な類型をもつことができる²³⁾。
類型は既製のもの(言葉として定着しているもの)が選択されるだけでな
く、その場で暫定的に作成されたりする。一人が複数の類型を持ち得ると
いうことは、話し相手に応じ用いられる類型関係が変化することを意味す

るだけではない。同じ話し相手との会話を‘通時的’および‘共時的’に観察しても複数の類型が用いられ得ることがわかる。

発話時に話し手が意味を付与する（聞き手が意味を解釈）する上で関連してくるのは言語化され話題となっている類型だけではない。同時に幾つかの類型が類型関係を多層的に形成している。各々の関係から引き出される意味が複合され、言語的命題以外に様々なニュアンス、含意が生まれる。

4.1.1. 会話構造上の類型関係

会話参加者は会話構造上、話者、聞き手、（傍観者や素材としての）第三者に類型化され得る。話者は誰を聞き手とし、第三者とするか等、会話構造上の類型をある程度まで選択できる。それ以外に話者は—社会構造上の拘束を受けながらも—言葉の持つ集合性、排他性を利用して、自分や聞き手／他者を話題の類型関係や自分と同じ（または、異なる）集団に、さらには、類型が呈示する世界に巻き込むことができる。

話者は、こうした自由をもつ以外に、類型的知識を呈示することで一定の力を行使している。まず、類型的知識を述べるという発話行為自体が「論理性」の呈示となり、社会に支えられた行為として自己の言動を正当化する。また、その「正当」な発話行為を通して（自身であれ、他者であれ）類型化した対象の行為を正当化したり、批判したり、価値判断を下したりすることが可能となる。

また、これを隣接対という会話規則から捉えることもできる。隣接対においては第一ペアが行為を選択する権利をもっており、第二ペアはそれに応じることで優先対を構成し、「普通の」状態をつくる²⁴⁾。それと同様、人物類型を使用して、類型的知識を述べた話者は第一ペアとして（社会に支えられた）世界観を呈示することになる。第二ペアである次の話者はその世界観に従って（同意して）優先対をつくるか、あるいは、抗して非優先対をつくることになる。話者は、ある現象に出くわして、それを一定の類型に付随する事象として関連づけると、類型的知識の他者との共有を想定している。しかし、その一方で、類型的知識は話し手個人の経験、価

値観に基づく認知傾向を示すものであるため、個人性と社会性を併せもつ類型的知識の呈示が相手との間に摩擦を生む源となりうる。3行目で清子が「初めからうまいこと順番にする」ことを「女」の類型的知識として述べたのに対し、昭夫は10行目で、「まあ、そやけどな」「やっぱり」を用いて清子の、「女」を用いた知識の呈示に異議を唱えて自分に有意味な類型、および、その知識の導入をはかっている。

4.1.2. 話題と社会構造上の類型関係

ある類型が話題として呈示されると関連する類型が明示、あるいは、暗示されるということは既に2.2.2で述べた。話者は類型を呈示することで、会話参加者をそれぞれ類型関係のどこに配属し、どのような内外集団を構成したか、現在の事態に対し、どのような価値観をもって類型を示したか等々が発話の意味構成に大きく関わってくる。また、発話上現われた話題の類型（および、それにより示される類型関係）以外にも参加者間の社会構造上の類型関係によって引き出される意味がさらに関与し、発話により付与／解釈され得る意味は多層的なものになる。これらを以下で項目にまとめ、談話資料の分析を試みる。

- ① どの類型が話題となっているか
- ② どの類型が関連する類型として引き合いに出されるか
- ③ その時どんな類型的知識が非対称的相互排除の関係におかれているか
- ④ 話題の類型関係における話者および会話参加者の位置付けはどうなっているか
- ⑤ 類型化の対象となった人物の態度や行為は類型的知識に一致しているかどうか
- ⑥ 話者は類型的知識に対しどのような価値観を抱いていると考えられるか
- ⑦ その類型関係において話者および会話参加者の内外集団への所属はどうなっているか
- ⑧ 話者は話題の類型関係の他、社会構造上会話参加者とどのような類型関

係にあるのか

- ③それが、話題の類型関係から引き出される意味とどのように複合的に関わってくるか

談話資料 3行目における「女」の類型的知識の呈示で以下のことが読み取れる。[]内は2章で用いた認知図式の記号を示す。

- ①「女」をもちだすことで、[A]
- ②（言語上はあらわれないが）「男」を関連類型として対比させている。
[B]
- ③「女ははじめから誰もいわない、はじめからうまいこと何でもみんな順番にやる」と述べることで「男は（女のように）うまく順番にやらない」という類型的知識を引き出しているが、その「男」の知識とは、すなわち、「一人で準備をする（4～6行目）」という昭夫の行為を指す。
[A(a) → B(-a), -a = b]
- ④清子 = 女 [X = A], 昭夫 = 男 [Y = B]
- ⑤ここでは、逸脱は問題となっていない。昭夫の行為を「男」に付随する行為として呈示している。
- ⑥昭夫が一人で準備をすることに対し、不満をもっている清子は昭夫の行為を「男」の行為として呈示することで、「男」を非難、軽蔑の対象としている。同時に「女」の「順番にうまくやる」という行為が正しい行為として呈示される。
- ⑦「女」という類型をもちだして、清子自身をその中に入れることで、「女」の行為を自分の行為として正当化しているとともに、暗に清子の女友達全体を高めている。また、昭夫を「男」として外集団化することで、昭夫のみならず、昭夫の暮仲間全体を批判している。[X₁, X₂, X₃・・・ = A (内集団化)] [Y₁, Y₂, Y₃・・・ = B (外集団化)]
- ⑧清子と昭夫は「妻と夫 = 夫婦」である。
- ⑨「夫婦」からは内集団としての連帯意識が働いている可能性がある。夫婦という類型が内集団として意味をもつと、今度は昭夫にそういうこと

をさせている碁仲間が外集団化され、清子の非難の対象となる。その他、清子、昭夫以外の聞き手も全て「近親者」という内集団をつくっている。清子は昭夫を「男」として外集団化し、非難しながら、他方で「夫婦」として内集団化し（＝碁仲間を外集団化し）、昭夫が「一人でさせられている」実態に対する同情を、会話参与者全員が内集団員となる「近親者」に求めていると解釈することができるであろう。

このように、呈示された類型的知識と会話参与者間で関与する複数の類型関係との位置付けを見ると、発話の意味が多層的に肉付けされていることがわかる。ただし、今述べた関係がどの発話においても全て必ず発生し、各々から生じうる意味が同様の強さで合成しあうというものではない。その場の話者の類型化活動や会話参与者の関係に応じ、その都度前面に出てくる（聞き手が感じ取れる）意味、および、その強さ（明瞭さ）は異なってくる。

4.2. 人物類型の通時的複数性

最後に、類型の通時的複数性、つまり、話題となる類型が談話の流れの中で変化していく現象に注目したい。

いま、「一人で準備する」という昭夫の行為が問題になっており、清子は「女」という類型を用いることで参与者を「男」と「女」の類型に配属させ、「男」の行為を非難したわけだが、昭夫はそれに対し、「まあ、そやけどな」と、清子の示した世界観に抗して（4.1.1.参照）、自分を最下位の棋士として位置付けた（「おれ一番下やねん、一番弱いねん」）。このことで、話題の類型関係が「男女」から「棋士」へと移った。このように類型の変更が可能だったのは、昭夫が「一人で準備する」という行為を「棋士」に付随する知識として再呈示したためである。

こうした変更で昭夫は何を行っているのだろうか。類型的知識の呈示はそれだけで事態を正当化するということを述べたが、ここにおいても、碁の世界における常識的な見方を持ち出すことで、清子の非難の対象だった

行為を、正しい行為として定義しなおしたのである。つまり、昭夫は教えてもらうという恩恵を受ける者が上下関係の中で当然行なうべき行為として自分の行為を示したのである（13～14行目）。「一人で準備する」という昭夫の行為だけでなく、「昭夫に準備させる」他の棋士たちの行為も類型的知識に合致したものとして正当化される。また、それだけではなく、昭夫は「棋士（碁の仲間）」を内集団化させることで、清子を外集団化させ、清子の攻撃から碁の仲間をかばっているということになる。

以上、類型を一つ呈示すると類型関係および類型集団、内外集団が形成されること、類型を変化させることで、関与者を位置付けるそれらの地図が大きく塗り替えられることが示せたかと思う。

5. まとめ

本稿では言葉と現実の人々の行為の自律性および相互依存性に注目しながら、類型化活動に付随する基本的な事象を、まずは、認知図式について、次にはそれに社会心理的側面を加え、最後に両者を会話参加者の類型関係と関連付けて述べてきた。

言語的な意味だけでなく、人々の社会的現実を構成している類型的知識（＝常識）に見出される体系性や会話を成立させている参加者の多層的類型関係、また、参加者の行為と類型的知識の絡み合い等を談話分析の意味解釈に導入することで、発話の持つ（感情を内包した）多層的な意味を把握することが可能になる。こうした視点からの分析は、たとえば、皮肉のような言語外的意味の発生メカニズムを理解する上でも非常に有効になると思われる。また、談話における発話の位置²⁵⁾やローカル、グローバルな会話構造など、会話分析のもう一方の柱を考慮に加えるとダイナミックで、多元的な意味世界に関するさらに興味深い側面がみえてくるだろう。

- 1) Malinowski(1923)の‘transmission of thought - phatic communion’
Brown/Yule(1983)の‘transactional -interactional’等の用語で両
タイプを比較することができる。
- 2) B/L(1966), 特に訳書P.257-260。
- 3) SchutzやB/Lは類型化(Typisierung), SacksやJayyusiはカテゴリー
化(categorization)という用語を用いているが, 両者とも同様の意
味をもつものとして理解する。
- 4) 先行研究に関しては野呂(1992)。
- 5) たとえば Levinson(1983), McCarthy(1991), Stubbs(1983), Fasold
(1990)は(その扱いに大きな差があるが)主として会話機構を解説し
ている。Coulthard(1985)は, 会話機構以外にSacksのカテゴリー化の
問題を主にトピック機構との関連で紹介している。Wardhaugh(1985/
1986)は, Sacksのカテゴリー化問題, あるいは, エソノメソドロジー
全般の根底にある現象学的社会学の視点を明確な形で呈示している。
- 6) ガーフィンケル他(1987)P320-322。
- 7) Sacks(1972b)P330。
- 8) 以下の3歳5ヵ月の幼児の会話においては家族という概念がまだ形成途
中にあることが窺える。成人の場合, [母親/父親/子供]のいずれ
かの家族成員が欠けていれば注目すべき欠如として認知される傾向に
あるが(Sacks:1972b, P334, 336など), この幼児は—ままごと遊びで
は[母親/父親/子供]の役を割り振るにも関わらず—例においては
[子供]を具体的な指示対象としてしか理解していないことがわかる。
母親:(桃太郎の話について)おじいさんとおばあさんには子供
がないんだって。
子 : 誰の子供?(=子供って誰のこと?)
- 9) B/L(1966), 訳書P102。
- 10) 間主観性, 自然的態度, 間接呈示等はSchutzの生活世界を構成する基
本概念である。
- 11) Jayyusi(1984)P47-56にて集合性に関する議論を行っている。

- 12) Sacks(1972b)P335ではcategory-bound activitiesという用語を用いている。
- 13) Sacks(1972b)P333-338。
- 14) 非対称的相互排除については，特にJayyusi(1984)P122-139。
- 15) 常識のゆれと安定性については野呂(1992)P88, 92。
- 16) B/L(1966)，訳書P105。
- 17) B/L(1966)，訳書P166-173。
- 18) 認知的／規範的要素の連続性については，B/L(1966)，訳書P159/185。
- 19) 池田／村田(1991) P61。
- 20) 池田／村田(1991) P61/216。
- 21) 池田／村田(1991) P63。
- 22) 池田／村田(1991) P78。
- 23) 類型化の多様性についてはJayyusi(1984) が詳しい。
- 24) Schegloff & Sacks(1974)，Pomerantz(1984)，Davidson(1984)等参照。
- 25) Schegloff(1984)。

参考文献

- Atkinson, M./J. Heritage(eds.) 1984. "Structures of Social Action"
Cambridge U.P.
- Berger, P.L./T. Luckmann 1966. "The Construction of Reality" New
York. P・L・バーガー＝T・ルックマン著，山口節郎訳 1975 『日常世界の
構成』新曜社
- Coulthard, M. 1985. "An Introduction to Discourse Analysis"
Longman.
- Davidson, J. 1984. Subsequent versions of invitation, offers,
requests, and proposals dealing with potential or actual
rejection. in:Atkinson/Heritage(eds.) pp102-128.
- Fasold, R. 1990. "Sociolinguistics of Language" Blackwell.
- Garfinkel, H. 1967. Studies of the routine grounds of everyday

- activities. in: "Studies in Ethnomethodology" Prentice-Hall, pp35-75. サーサス, G. / H. ガーフィンケル / H. サックス / E. シェグロフ 著, 北澤裕 / 西阪仰 訳 (1989) 『日常性の解剖学: 知と会話』 マルジュ社, pp31-92.
- Jayyusi, L. 1984. "Categorization and the Moral Order" Routledge & Kegan Paul.
- 池田謙一 / 村田光二 1991 『こころと社会』 東京大学出版会
- Levinson, S.C. 1983. "Pragmatics" Cambridge U.P.
- Malinowski, B. 1923. The Problem of Meaning in Primitive Languages. in: Ogden, C.K. / I.A. Richards. "The Meaning of Meaning" Routledge & Kegan Paul Ltd. オグデン / リチャーズ 共著, 石橋幸太郎 訳 1967 『意味の意味』 ぺりかん社
- McCarthy, M. 1991. "Discourse Analysis for Language Teachers" Cambridge U.P.
- 野呂香代子 1992 「日常会話と常識」 『日本学報』 第11号, 大阪大学文学部 日本学研究室
- Pomerantz, A. 1984. Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. in: Atkinson / Heritage. (eds.) pp53-101.
- Sacks, H. 1972a. An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology. in: Sudnow (ed.). "Studies in Social Interaction." Free Press. pp31-74.
サーサス, G. 他著, 北澤 / 西阪 訳 1989. pp93-173.
- Sacks, H. 1972b. On the Analyzability of Stories by Children. in: Gumperz, J. J. / D. Hymes (eds.) "Directions in Sociolinguistics" Holt, Rinehart & Winston.
- Schegloff, E. & H. Sacks 1974. Opening up closing. in: R. Turner (ed.) "Ethnomethodology" pp233-264. サーサス, G. 他著, 北澤 / 西阪 訳 pp175-241.

- Schegloff, E. 1984. On some questions and ambiguities in conversation. in: Atkinson/Heritage(eds.) pp28-52.
- Schutz, A. 1962. "Collected Papers 1: The Problem of Social Reality", edited and introduced by Maurice Natanson. Martinus Nijhoff.
M. ナタンソン編, 渡部/那須/西原訳『社会的現実の問題 [I]』アルフレッド・シュッツ著作集, 第1巻, マルジュ社
- Schutz, A. 1970. "On Phenomenology and Social Relations" The University of Chicago Press. アルフレッド・シュッツ著, 森川眞規雄, 浜日出夫訳 1980 『現象学的社会学』紀伊國屋書店
- Schutz, A./T. Luckmann 1979 "Strukturen der Lebenswelt" Suhrkamp.
- Stubbs, M. 1983 "Discourse Analysis" Basil Blackwell.
- Wardhaugh, R. 1985 "How conversation works" Basil Blackwell.
- Wardhaugh, R. 1986 "An Introduction to Sociolinguistics" Basil Blackwell.

談話資料

シナリオ作家協会『シナリオ』1989年12月号, 1990年1, 2, 4, 5月号
みつはしちかこ.(1984-88)『ハーイあっこです』1, 4巻. 立風書房
その他, 筆者周辺で行われた会話

(本学文学部助手)